附問題

國民修身談

末松謙澄著

全

教育
E 535
S

30555
教科書文庫
130
110
31-1891
20000
51147

中央図書館 教育学科
広島大学 教 51147
E535 S

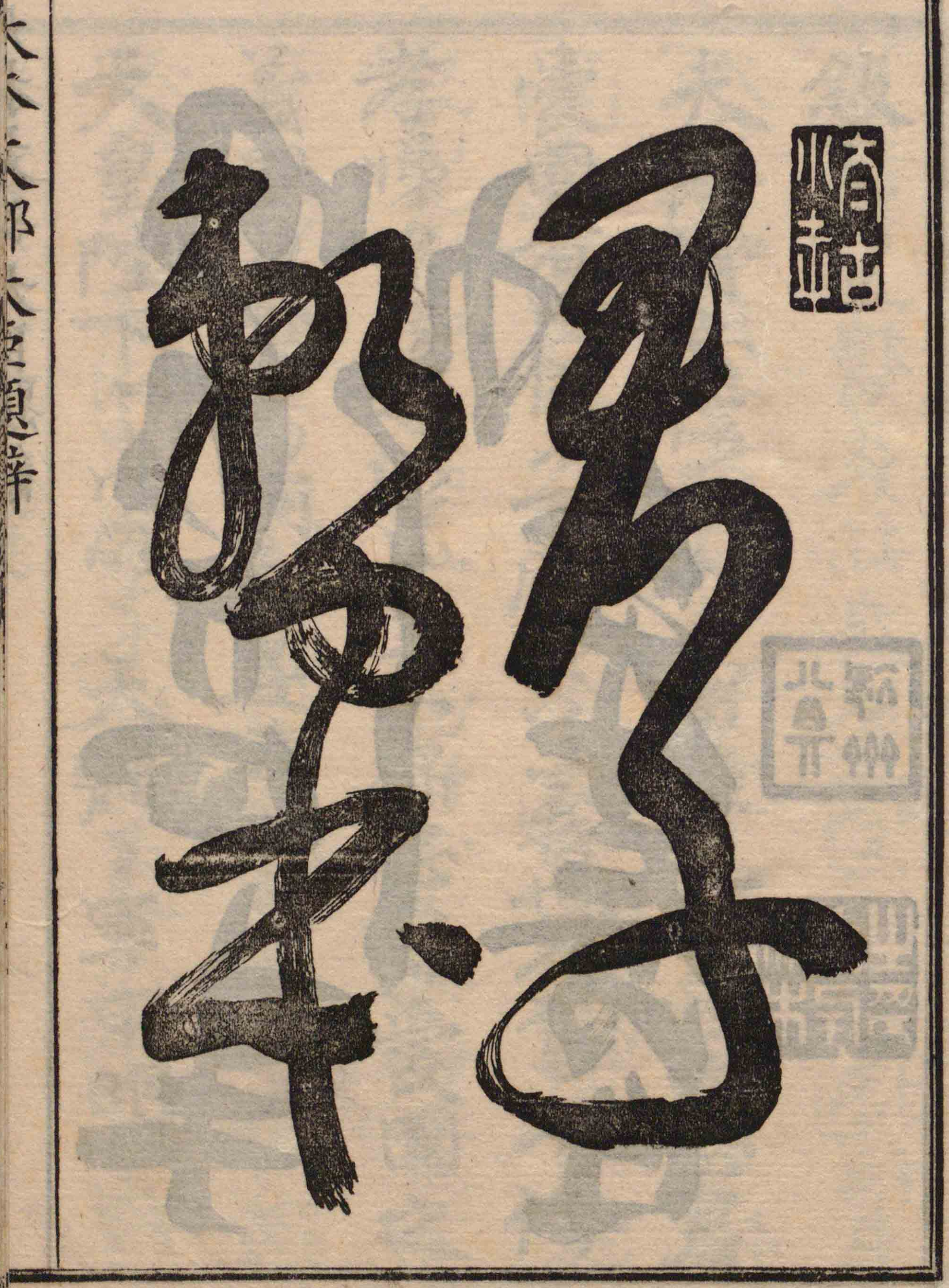
文學博士末松謙澄著

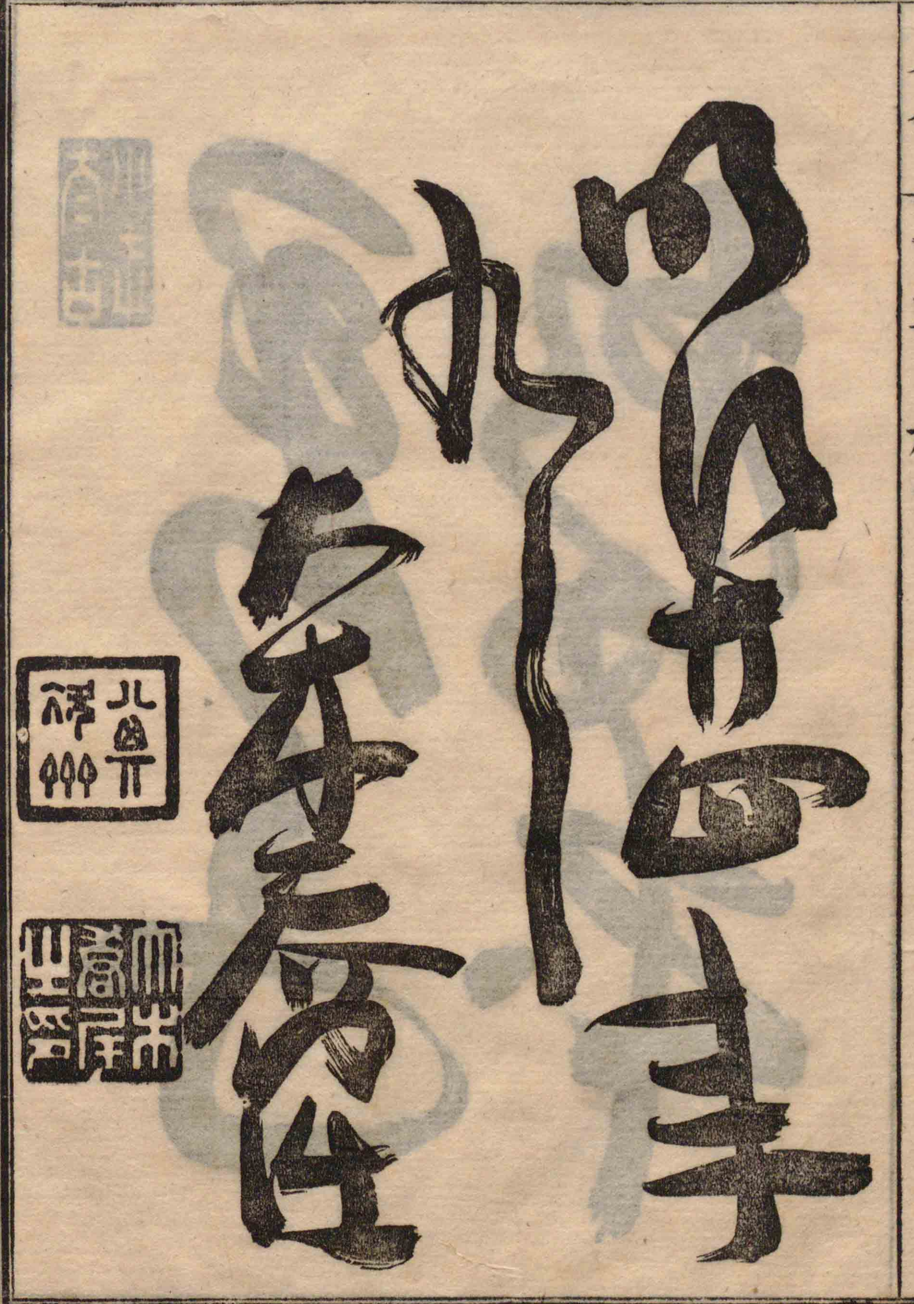
問題附

國民修身談

全

東京金港堂發兌





敍

夫孝悌忠信者人々當俟之令所而忠君愛國者臣民不可虧之公義也人苟不修孝悌忠信之所出焉不知忠君愛國之義則与禽畜何別是哉

天皇陛下之所以　天語丁寧申明

祖宗之遺訓也爾来操觚之士加之注釋
者不下十數家援典解義條分縷析殆
無遺而至列舉近坡事件幼童易
通曉者則未足多見常以爲憾頃友
人文學博士末松君著一書題曰國民修
身談以其稿來請序余披而閲之摘録古

今之嘉言善行附以問難使進德遷義
之旨趣瞭然乎一讀之下可謂能補諸家
之所不足者矣爲教師者讀之乎可以供
授業之用爲子弟者讀之乎可以爲進修
之資也於乎客歳十月　勅語之頒布也余
時承乏文部大臣今見此種之著續々出

者欲不欣然擱筆安得乎是余之所以不辭其請爲之序也

明治二十四年九月廿六日

阿波 芳川顯正撰

東京 秋月新書

緒言

一 予年十八九ノ時好ンテ先哲著ハス所ノ言行錄孝子傳及ヒ道話ノ類ヲ讀ミ嘉言善行艮訓ノ我心ニ感スルモノアレハ輙チ之ヲ抄錄シ之ヲ篋底ニ藏スルコト久シ此書ハ即チ其中ニ就キ特ニ兒童ノ敎誨ニ適切ナルモノヲ選擇シテ編纂シタルモノナリ聞クカ如クナレハ今ヤ修身書ノ小學及ヒ家庭ノ敎育ニ適スルモノ極メテ稀レナリ此書ニシテ若シ其闕漏ヲ補フコトヲ得ハ予ノ幸ナリ

一 此書ハ行文中多少ノ取捨折衷ヲ加ヘ訓誡ノ語弊ア

ルモノハ之ヲ省キ事實ノ複雜ニ渉ルモノハ之ヲ略シ且ツ往々字句ノ流暢明瞭ヲ缺クモノヲ修飾セシ等ノ事アリト雖モ大體ニ至テハ一ニ原本ノ舊ニ仍ル是レ力メテ先哲ノ意想ヲ保存シ敢テ予ノ私意ヲ雜ヘザラントスルニ出ヅ故ニ文章ノ體裁ハ各話自カラ異同ナキ能ハサルナリ

一 此書、本、談話體ヲ首トシ兒童ヲシテ知ラス識ラザルノ間ニ修身ノ訓誡ヲ錬習セシメンコトヲ期ス故ニ編纂ノ體裁必ラスシモ學理ニ因テ其順序ヲ嚴ニセス

一 此書談話ノ趣意ハ暗ニ明治二十三年十月ノ教育勅語ノ旨ニ符合スルコトヲ務メタリ

一 此書ハ教師ノ參考用ニモ兒童ノ習學用ニモ適スルヲ目的トシテ編纂シタリ若シ教師一本ヲ持シ兒童亦各々一本ヲ持シ且ツ教ヘ且ツ習フノ法ヲ取ラハ最モ授受ノ宜キヲ得ン

一 此書問題ハ特ニ其適切ナルモノヲ擧ク故ニ習學ノ際ニハ更ニ多ク類似ノ問題ヲ設ケ互ニ發明スル所アリテ可ナリ

明治辛卯九月二十日箱根宮之下ニ於テ

衆議院議員從四位勲五等文學博士
（英國マスタル、イン、ロース、兼バッチエロル、オフ、アーツ）
末松謙澄識

附問題 國民修身談上

末松謙澄編纂

○孝は百行の本

凡人の子としてはよく父母に事へ孝行をつくすべし親より受けたる身をそこなひまたは悪事によりて命をすつるたぐひを大不孝とす父母の恩ハ海よりも深く山よりも高し一夜のはぐくみ一日のなさけも其恩のあつきこと如何に一生つとむとて報ひ

をはるべきものにあらず然れハ寝てもさめても父母の恩を忘るべからず朝におきて鏡をとりわが顔をむかふれハ此身も心も直に父母のものなりと思ひ手足を見るごとにも親の身體に疵をつけじ親の心に耻をかゝせ奉るまじと父母の事をのみ思ひまはすべし孝ハ百行の本なり孝の道さへ立てハ萬にわたりて何事かあしかるべき

問題

(一)子たる者の第一の務ハ何なるべきか

(二)大不孝となるべき事柄は何なるか

(三)孝行の仕方ハ汝の家柄や身分によりて少しは違ふ所ありや

○蒲刈島新之助の事

安藝國蒲刈島に童子あり新之助といふ父は身やましくてわづかに己が用かなへるのみなり母は足なへしにびれ二人の妹もいとけなく家日々にきハまりて心ぼそきかぎりなり此島の民はおほくは松葉をとりて船につみいでゝうるを業とす新之助毎日人にやとはれて山より磯に松葉をはこびその賃を得

て親と妹をやしなふ朝はとく起て雜炊をたきその薄き所を己れすゝりて厚き所をあましぬ椀箸やうの物取そろへ父母の枕もとにすゑ置き目さめたまはゞまゐらせ今日はいづれの所へまかり候とまうしまた妹等にもよく〳〵をしへ置て出けりやとはれゆくにも近所をえらび松葉を負ひかよふ度に我家に入りて父母をかへりみ湯茶をすゝめなどしてまた出ぬ雨ふる日はわらづをつくりつゝ父母と打かたらひて徒に外に出ることなし新之助常にぼろ〳〵としたる物を着て夏はあつく冬はこゞえて見ゆれど人あはれみて物など與ふれど布は蚊帳にはりて親の枕をおほひ綿は親の夜具となして寒氣を防がしめ手拭はこれをあつめて襦袢となし妹にきせける

或日父いへらくわれ身やましくてかせぎに出ることと能はず年ゆかぬ汝に骨折さす不便さよと涙こぼ

しけれど新之助いらへてぬしの外に出たまはぬこころよく候へ常に内におはして火など焚給ふ故に家もにぎはひ母うへもさびしからでよく候と云ける孝子の心はいづれか淺かるべきされどこの童子の如きは更にあはれにおぼゆ寛政三年二月十五日國守より倉米十俵をたまへり

問題

(一)新之助は如何にして親に孝行せしや

(二)貧窮にせまり日々のくらしにこまりなば汝は如何に難澁なる仕事をもなして兩親をやしなふ所存なるや

(三)父母も弟妹も共に冬の寒さをふせぐべき着物なき時不圖親類より綿を贈られなば汝は之を如何にするや

○紙屑買の子と人買の事

寛政年間江戸湯島に住る紙屑買三郎兵衛といへるに九歳に成ける男子あり人買ひの手にとられ奥州に下りしに行く道に落たる紙くづあれば必ずひろひて懐に入れ置くこと毎日同じかりければ人買ひ怪みて尋ねしに父親は紙屑買ひなれば ひろひ置て參らせなばさぞ喜び玉はんとおもひあつむるなり

と答ふ又三度の食に向ふにも旅やどりに寢るにも必ず父母を拜し今頃は如何にしておはすらんとて我身の事はなげかずして只父母を戀ひ慕ひて巳まざりければ流石の人買ひも大に感心しおのれ親の生涯に不孝なりしことを思ひ知り深く慚ぢなげき是まで僅に世を渡らんとてあさましき業をなしつる故かゝる孝子さへかどはかして親にいくばくの歎きを懸けぬるこそあさましけれやがて此子を返

しやり假令飢ゆとも此業は必ずやめんと心を定め途中より彼の子をつれ引返して江戸に來り親元を尋て其家にれくりいたりぬ

折しも黃昏時なりけるが二親は我子の事いひ出て共にかなしめるに表の方よりこの子かへし候受取り玉へと内に押入れ一さんに走り去りぬ父母は思ひかけなき事なれば且驚き且喜びうれし涙に咽べる中にも三郎兵衞心付き今の人呼ひ止めて禮謝せ

んと走り出て尋ると行方しれすせん方なく歸りて我子に事の樣子を委しく聞て人買ひの心改りしも我子の孝心深き故なりとぞ知られける此子年長くるに從ひいよ〳〵孝心厚く其事官に聞に褒美の金下し給はりぬ

後數年にして彼人買僧となり來りて三郎兵衛親子を尋しに三郎兵衛は先の年病て身まかり孝子其跡をつぎ三郎兵衛と名乗り段々家榮に今は紙を商ふよき商人となりてあるにめぐり逢ひたり人買ひは孝子に耻ぢて心を改め出家して亡き兩親の冥福を修め不孝の罪を謝しいまは小庵の主となり心安く世を渡れることなど語りて先の人買ひには似もつかねぬ孝子も互に昔を語り二三日宿らせねんごろにもてなして別れしとぞ

問題

(一)人買は三郎兵衛の子の如何なる所に感ぜしや

(二)汝を苦しめたる惡人が後に改心して汝を尋ね來らば汝は如何に之を取扱ふや

(三)何時までも舊き怨を忘れぬは善きことなりや
(四)昔は人買ひと云ふことありたり汝は之を善きことゝ思ふや
(五)汝は學校にありても常に父母のことを思ふや
(六)汝は燒野の雉子、夜の鶴と云ふことを知れりや
(七)汝は子を持て知る親の恩と云ふ諺を知れりや
(八)汝は樹欲靜而風不止子欲養而親不待と云ふ語を聽きたることありや無くば予之を解聽せん

○廣瀨組かめが事

かめは安藝の國廣島の廣瀨吉左衛門が娘なり母は繼母なれどいとほしむこと實の親にもまされり父は中風の心地してよろめき母も脚氣に病みつきぬれば飢待むかりなるをかめ晝夜病人をいたはり何事につけ心をやらぬかたなくなしつゝ篩の底をあみ或は虫の籠など造りて夜は夜半まで力をはげまし日に錢七八十文を得てその内にて父には日どとに酒を買て飲ませ母には餅くだものなどすゝめその外親の好むものは力の堪ふべきかぎり供へずといふことなし又家賃とてゆるがせにせまじきものなれど父が常にいふをきゝて日々に少しつゝ持行き

納め終りて親の心をやすからしむ斯て同じさまにやしなふこと十年餘りぬれど怠るかた見えずかめ年わかけれど妻にほのめかす者も多けれど父母を見はなちては思ひも寄らずとて更にうけひかずして猶苦しみつかふるよし聞えけれど寛政二年十月二十一日國守より銀二百目を給はりける

問題

(一)かめは如何なる孝行をなせしや

(二)汝はかめが如き不仕合せに遇はゞ同じ様なる孝行をなすことが出來るや出來ぬまでもなす心ありや

(三)汝は勅語の父母に孝にと云ふ語をよく記憶せりや

○師は君父に同じ

凡學問藝術をまなぶものはまづ師匠をうやまひおそるべし古語にも人は三に生ず父母之を生み師之れを教へ君之をやしなふと云ふことあり師匠をば君父と同じく重すべし世の人やゝもすれば師を輕んじ教をあなどるものあり之がためにわざをも學び得ざるなり弟子はたとひ己れ少く才ありとも常

に心を盡して師を敬ふべしかくてこそわざをも道をも覺え得べけれ

問題

(一)何故に師匠は大切なるや

(二)汝の學校朋輩の内に常に教師の辭に背き剰へ之を侮る者あらは汝は其朋輩を善き生徒と思ふや汝は矢張其人と中好くするや斯る時にも汝は如何にすれは宜しと思ふや

○若林新七の事

若林新七といへるは淺見絅齋先生の高弟にて其名高し幼くして父をうしなひ母とゝもに逢坂にすみ至て貧窮なりしかど母よく我子を教育し京なる絅齋先生を師として日ごとに逢坂よりゆきかよはして學ばしめり年のくれに先生に歳暮を賀するため貧き中より麻上下をとゝのへきせてやりしに其日は先生の家煤はらひにて大にいそがしかりければ先生の命により其事につかはれて上下少しやぶれたるを母見てとがめしに其よしをつげければ母聞て師のおほせにより事をつとめし故の事ならばた

とひみなやぶれ損すとも聊惜むべき事にあらざればとがむべきやうなし この後とてもよくよく師につかへて少しも劬勞をいとふ事あるべからずまたよく學問に勉強すべしとをしへられしとぞ

問題

(一)もし童子ありてわるあそびのため着物をひきさきたらば如何

(二)もし人より破られたりとか又は己が破りし師匠の用事をなしてなど巧に云わけをなさば如何

(三)汝は師匠の爲めには如何なる助けをもなす覺悟なりや

○老人をは敬ふべし

總て老人をば敬ひいたはるべきなり世の人老人を見てはやゝもすればいやしみわらひないがしろにするものあり誰も老ぬれば同じ淺ましきかたちをうるものなれば身の上を思ふて必す人に禮を失ふ可からず

問題

(一)多くの子供の内には年行きたる人を蔑にする者あり汝は之を善きことゝ思ふや

(二)汝は汝の祖父祖母を父母の如く思ふて大切にするや

○徳川家綱の事

家綱公まだ竹千代君とて年六歳のとき近習の士を集め何時も山王祭の眞似をなしけり或時加々瓜半之丞とて年六十計にて實體なる人ありしが次の間に伺候せしに左右の人々半之丞が屋敷は山王の間近にてあれば此祭の元は半之丞こそ仕るべけれ少々祭禮の眞似させて御覽なさるべしと三度まで言上に及びける竹千代は半之丞が殊の外迷惑の躰なるを見玉ひて半之丞立てとあれば半之丞すなはち退出したりける後にて人の迷惑する事は我面白ければとて決してなすまじき事ぞといたひげに仰せられしとなり

問題

(一)竹千代は近習の人々に如何なる戒をいはれしや

(二)汝は人の一心に勉強する所にてさどよめき騷ぎ或はいろ〳〵のあそびごとをなすを面白く思ふや

(三)もし朋友が勉強せんとするとき無理に遊び事をすゝむる子供あらば汝はこれを好き事と思ふや

(四)ある子供が汝に向ひ道におとし穴を掘り往來の人をつまづ

かしめなぐさみにせんとすゝむるとき汝は如何なる返答をなすや

○友悌の道

兄弟は同じ父母の血をわかちたるものなれば影の形に隨ふ如く思ひかはして互に疎略にすべからず兄としては弟を愛み我身の如く思ひ我欲せぬ事はいとひ棄て弟としては兄を親み其意に違はず互に萬事につけ是にも非にも相談して睦くくらすべし如此なれば神もよろこび人にも敬はるべし

然るに世には兄たるもの難儀なる事は弟に譲り弟と物など分つときは吾は兄なりと云ふて過分をとり弟たるものは決して難き事などには兄に語りよきものなどある時は之を避け親の譲りを受るときも兄は我ぞかり取らんとし弟は是を奪はんとし遂に不和となり互に仇をふくみ他人にも劣るものあり責て一人直ならば斯る事は有まじ兄弟の不和は欲より起るものなり弟愚痴なりとも兄欲を離れてあ

はれまば弟もそむくこと有べからず兄我儘なりとも弟欲みそむかれて敬まねゞ兄も縦まゝにすることと有べからず是を思はずして唯我身の利をのみ計る如此ものは久しからずして斃るべし螻蟻の君臣鴻雁の兄弟と云ふことあり人にして禽蟲にも及ばざるべけんや

問題

(一)兄弟は何故睦じくするをよしとするや
(二)兄弟睦まじくすれば如何なる利益ありや
(三)兄弟の不和は重に如何なることより起るや

(四)世間の兄弟には如何なる人多きや
(五)兄は弟に對し平生如何なることをすれば宜しきや
(六)弟は兄に對し平生如何なることをすれば宜しきや
(七)汝は勅語の兄弟に友にと云ふ語をよく記憶せりや
(八)女兄弟も男兄弟も道理は同じきや

○兄弟和睦の事

備前の池田光政の領國に兄弟の民田地を爭ひ年を經て止まざるあり後にも双方に方人(かたうど)出來て代官の命に從はず光政之を聞かれ人倫に關することなればおろそかならずとて熊澤了介先生の弟泉八右衛

門に之を斷せよと命せらる泉は孔孟の學に精しき人なりしが某其職に非ずして斯る訴訟を與り聞んやうなしとて度々辭しけれども聽されず然らむ某が宅にて聞き申さんとて兄弟を呼寄せ方人の事は何事も聞ずとて悉く退かしめ家來を以て兄弟にいはせけるは今日俄に用事出來せり時も移る間打解て待つべしとて兩人を狹き一室に入置て終日出會はず食事等懇にとゝのへて酒をも出し寒ければ入

湯せよとて風呂を設け一同に入らしむ暮に及て又家來出て公用未だ終らず夜更るとも今夜中に訴を聞くべしとて二人の間に火鉢一ツ置き夜中に及べとも出會はず

兄弟のもの共は日の中は互にものをも言はざりしが今一室の內に終日面を合せては流石血を分けし好みにて一人が夜更て寒し近く寄りてといひしより何となく居寄て熟々竹馬の鞭の振分け髮なりし

親みを思ひ出るまゝ兩親の事など語り出し有し昔しの墓はしく覺えて兄がいふやう今思ふに此度の訴は某が強て云募りしより事遂に斯なりけり今より爭を止て二人にて彼の一田を耕さんといふ弟は元より左あらんに何の異存かあるべき然らば此由を申上て見んとて共に以前を後悔の由述べければ八右衛門其まゝ出て二人の所存にとわりなり目出度事此上なしとて親の遺體骨肉の去り難き理を彼

等が解しやすきやうに說聞せければ兄弟涙に咽び打連立ちてぞ歸りける

問題

(一)泉八右衛門は何故此兄弟を長く一室に入れ置きしや

(二)兄弟は如何なることに感して仲直りせしや

(三)兄弟の一人が前非を後悔せしとき他の一人が我意を張りたらは汝は之を如何に思ふや

(四)汝は兄弟喧嘩をなすときは其身其家の耻なりと思ふや

(五)汝は兄弟の親みと爭ふ所の田地と孰れか貴しと思ふや

(六)汝は兄弟鬩「墻外禦」其侮」と云ふことを知れりや

○兄弟の鬩

京都に兄弟の農夫爭論をなして所司代に訴ふるものあり各一瓢を手にして事を辯す其瓢の由來を尋ぬるに弟まづ告て曰く是我父家を分つ時我兄弟に分ち與ふる所なり父吾等二人に語るやう汝兄弟此瓢を見ること我を見るが如くし瓢のあらん限り二人互に相爭ふの意あることなかれ吾遺言を以て汝等を戒めんと欲すれども時過ぎ歳馳せたやすく之を忘れんことを恐る故に今此瓢を殘して汝等に與

ふ吾死するの後必これを忘るゝ事なかれと其言猶耳に在り吾豈徒にこれにそむかんやたゞ兄我を待つこと甚薄きを奈何せん兄亦云ふ吾常に父の遺言を思ひ此瓢を忘るゝことなし唯弟我に事ふること甚だ禮なきを奈何せんとて倶に大に爭ひ辯す所司代之を聞き熟ら其瓢を見て兄弟のものに向ひ汝が父の此瓢を汝兄弟に與ふるは汝等のよく心を合せて家事をつとめん事を欲するにあり汝等何ぞ

之を察せざるや深く求め詳かに顧み父の意をうけて直に此争をやめよといふ兄弟猶之をさとらず所司代乃ち吾れ事を以て汝に示さんとて兄に命じてその持てる所の瓢を其前に立しむ兄其言の如くせんとすれども倒れて立たず乃ち又弟に命ず亦倒るゝこと兄の瓢の如し是に於て兄弟に命じて二瓢を并せてひとしく立しむ兄弟其言の如くすれば始めて倒れざる事を得たり所司代因て兄弟に向ひこれ

を以て思ひ見よ互に助けなすときは猶此瓢の如くならん汝兄弟よく心を盡し志を合せつとめて相疎んずる意を生ずる事なかれと云ふ二人初めて夢の覺めたる如く感喜して去りにける

問題

(一)京都の兄弟が相争ひし概略を話せ
(二)汝は此兄弟の持ちし瓢は如何なる形なりしと思ふや
(三)汝は所司代の諭しを道理に適へりと思ふや
(四)とゝに兄弟ありある日兄酒に酔ひ外より還り弟に悪口の末傍にありし棒を取り上げ弟をうたんとせしも弟は之を避

けんため外に走り出でしに兄また之を追かけ石につまづき仆れて大怪我したりと見よある人々の始末を聞き弟がその時逃げ避けずば打たれなばかゝる怪我を兄は負はせじものといはゞその人の言果して道理ありや

(五)汝に亂暴なる弟あらば如何に之を取扱ふや

(六)汝大雨の日途中にて雨具なき兄が雨に打れ通り過ぐるに逢はゞこれに汝が持てる雨具を貸すやまたはみぬふりして往くや

(七)兄あり無禮に弟をあしらひ弟これに向ひ悪口雜言せば汝は此二人を如何に思ふや

○信義の交り

朋友の交は相互にうちとけて睦しき中に敬を存し忠孝技藝を相勵まし且ついさゝか信義を失ふべからす善事は人にもはなし上にも達すべし過失は假にも人に告げて笑ふべからず能く其人の前まて諫むべし今の風俗は目前にては云ふべき事をも云はす互に諂ひ笑ひなどし親しきよりして互に禮法を失ひ過ありて諫むべきは誠心より發せずして嘲弄同樣に云ひ出しかへつて爭論のはしを開きかどするのみか平日のはかしも飮食衣服の事にあらざれ

ば金錢利欲の事にすぎす學術技藝の事を論談して共に智識をひろむるもの少なく甚しきは相欺き相陷るゝものあるに至る淺ましき限りなり夫れ己れ信義を失はざれは他人また信義を我れに盡す又愚癡なる者も人の過を見るは易く聰明なる者も己の過を責るは難し他人を責るの心を以て先づ自ら我身を責むべし竹馬の交りより此心なくんば終に友誼を全うすること能はす

問題

(一)朋友の交りは如何にせばよろしきや

(二)もし朋友に過ちあるときは如何になすべきや

(三)他人をして己に信義をつくさしめんには如何せば宜きや

(四)汝は勅語の朋友相信しと云ふ語を能く記臆せりや

(五)夏の日朋友と旅せる折木蔭に憩はんとするに一方は凉しく他の一方は少しく日あたりなるときは汝はどちらの方に憩ふや

○命を拋て恩を報す

命をば山岳よりも重しと思ふて大切にすべし然れども時によりては義の爲めに命を捨ること鴻毛よ

りも輕くすべし之を眞の勇者と謂ふ
福島正則近習の士に少しの過ありて廣島城内の櫓
に押込め餓死せしめられんとする者ありしに其士
の恩を受けたりし茶童ありて重き罪もなくして斯る
有様なるをいたみ夜ひそかに燒飯を携てゆきたり
彼の士吾は罪ある故に斯なりたり汝只今の振舞正
則公聞玉はゞ吾よりも罪重からん又飯を喰たりと
て命の助かるべきにあらざれどとく歸れと云ひし

に茶童云けるやうたとひ罪せらるゝも悔ゆること
なし我先に既に殺さるべき事のありしに君の救ひ
にて一度助りたり恩を受けて報ひざるは人にあら
ず君もまたよはげなる心をばして我意をむなしく
し玉ふにやと歎けば彼男さらばとて悦んで食ふ
夜毎に如此したりければ日數經て正則はや死したた
るならんとて櫓に行て之を見るに彼士顏色少しも
おとろへず扨は飯を送りたる者あらんと怒られし

に茶童進み出て某より與へ申たれと云ふ正則はたとにらみ何故に斷したるぞ頭二ツに切わりなんと膝立なほさる茶童は少しも動かず我むかし罪を得て水せめに逢ひ既に殺さるべかりしに彼の人の申ひらきにより今日まで思ひがけなく命ながらへ候其恩を報ひんがため夜毎に忍んて養ひ候といふ正則怒れる眼に涙をながし汝が志感するにあまりあり斯こそあるべけれ彼士をも赦すべしとて其まゝ

櫓の戸を開きて罪をなだめ茶童をも深く賞せられたり

(一)一度恩を受けたる人なれば其人に如何なる罪ありとも救ふべきや

(二)其人に實に罪ありて國法に據り正當の裁判を受けしとき己れ嘗て恩あればとて上を恨むるは之れを法を讐とすと謂ふ今もし彼士に實に餓死せしむべき罪狀あらば茶童は如何なる事をなすべきや

(三)汝は勅語の國法に遵ひと云ふ語をよく記臆せりや

(四)茶童は己れ命の助かることを知て飯を與へしや

(五)正則茶童の言を聞て感心し二人を救ひたるは義といふべきか

(六)もし汝が學校の歸りに過ちて橋より川底におちしとき通りかゝりの人に救ひ上げられほどへてその人病氣の爲め路の傍に倒れ居らば汝は之を如何にするや

(七)或る子供が狂犬にかみ殺されんとするとき人ありてその場に駈けつけ狂犬を逐ひ拂ひ子供に別條なかりしことありのちその人の子供が又狂犬に喰付かれしに嚮きに助けられたる子供これを見ながらさきに我が助けられし人にあらでその子なれば我之を助くるに及ばずとて通りぬけたらばこの子供の言ふ所理に合へるや

○小惡も必す改め小善も必す爲すべき事

惡と知らむわづかなりともなすべからす小惡をいとはぬものは必す大惡にうつりやすしたとへば一

錢の勝負をわづかなりとてなすものは後は萬錢の勝負をもなすが如し善とゑらむわづかなりとも必すなすべし一善をなすものは必す萬善を思ひ我のみならず人まで善なるを願ふものなり

○森蘭丸の事

人は正直にして僞りなきことを務むべし正直なればば幸も自ら來るものなり

森蘭丸は織田信長の近習なり信長或日厠に入られ

しとき蘭丸に刀をもたしめしに蘭丸其彫鞘(きざみさや)の輪(わ)数(かず)をかぞへ居れり程過て信長まはりの人々に此輪数をあてたらんものには此刀を與へんとありしに人々推量りて其數を云ふ蘭丸ひとり口をひらかざるほどに汝は何如にして申さぬぞと尋ねらるゝに某は嘗てかぞへ申して知り居り候と答へければ信長感じて其刀を賜はりしとなり

(一)信長ハ蘭丸の如何なる處に感心せしや

(二)こゝに童子あり戸棚を掃除せるに盆の中の蜜柑ほかにころげ出ければ取て之を食へり後に母問ふやう汝ハ盆中の菓を取りしや童子否と答ふ時に其妹ひそかにさきの様子を見居りし故に其詐りなることをあかす童子曰くわれ食ふハ食へり而も盆外よりとりて食ひしなり母とひ玉ふハ盆の中のくだものをとりしやといふわれ其ゆゑ否と答へたりといふ此子始より虚言を云はず汝ハこれを理にかなへりと思ふや又斯るとき童子は何と答へたらば宜きや

(三)汝は己を欺くと云ふことを知れりや

(四)汝は正直の頭に神やどると云ふ諺を知れりや

(五)汝は心だに誠の道にかなひなば祈らずとても神やまもらんと云ふ古歌をきゝしことありや

附問題 國民修身談上 終

附問題 國民修身談下

末松謙澄編纂

○心は鏡の如し

心は鏡の如し學問するは、とぐが如し心をあきらかにせんと思はゞ隨分學問して、とぐが肝要なり朝に道を聞て夕に死すともよしと思ふてすゝむべし根をやしなへば枝茂り源をにごさゞれば末清し根と源は心なり磨くべきは心なりけり

教の歌

一みな人の本の心はますかゞみみがゝばなどかくもりはてなん

千代よろづたえず誠の鏡をばみがけよみがけ日々に新たに

慎みを人の心の根となせば言葉の花も誠にぞさく

我心れもてにいづるものならばいかに姿のみに

くかるらん

きずしなき玉を心に抱きつゝみがゝんとする人のなきかな

人多き人の中にも人ぞなき人になれ人々になせ人

○義を守る貧者の事

ある國にて山に藩主の墓ありて士分の者共は多くはその麓に葬りけり、かゝれば中元には家々より

墓所に燈籠を供ふると毎歳の事なり大祿の家こそ假屋を造り人をつけて守らせもすれ、その外は大かた夜の、ふけれはともしすて、歸るを常とせり或年のことに其あとに下部の惡黨ども來りてともしすてたる火を打ちけし蠟燭をうばひとりけり側に乞食とおぼしきもの薦（こも）をかぶりて臥し居たりけるが、それを見て祖先のためとて人の墓にすゝめけるものを、さやうに狼籍する事やはあると制しけるに惡黨ども、聲高に罵りて、こもをかぶる身として、いらぬ事をいふ奴（やつ）かなと云ひしに、その乞食聞て、おの〱が今するやうなる事を、せぬゆゑにこもをもかぶるぞと云ひしとぞ世の人多くは義に背きても富貴なるものを羨み道を守りても貧賤なるものをいやしむ、これ甚だ理に違へり不義の富貴は浮雲の如しとて心ある人には却てうとまるゝこと此貧者の云ひし如きものな

り

問題

(一)乞食は悪黨に如何なる答をなせしや

(二)道を守つて貧賤なる者と義にそむきて富貴なるものといづれをよしと思ふや

(三)友達あり汝に向ひ、ひそかに父の金をぬすみ倶に芝居見にゆかんとすゝめば汝は如何に返答するや

(四)かほもみしらぬ人が何の次第もなく汝に多くの紙幣を與へば汝はそれをうけとるや

○金をわたくしせぬ紙屑かひの事

文化十三年十二月二十五日或公家(くげ)の臺所にて紙くづをうられしに其をりから知行所より納めし銀貳拾四両餘りありけるがうせていかにさがしもとむれどもしれざりしに廿七日に至りてかの紙くづかひ來りて一昨日處々にてかひとり候紙くづの中に銀子それあり外々をたづね候へども知れ申さず定めて御殿のものならんともち來り候御心あたりあらばかへしまゐらせんといふにぞ人々よろこび銀のかけ目書付などの事をいふに一々符合せしかば

出してかへしたりさるにても絶えてしらざるものいしかもいやしき事を業とするには似合はざる無欲のものなりとみな賞美し其謝禮とて錢あまたあたへしかどさらにうけず強ていへどもかたく辭して去りぬ嗚呼其業はいやしといへども其心は位ある人にもはづかしからずみな人かくこそありたけれ

問題

(一)何故紙屑屋は人も知らざるに其金をその儘とらざりしや

(二)また與へんといふ金を何故うけざりしや

(三)汝もし古本を買ひしときその中に紙幣ありたらばこれを如何にするや

(四)もし學校にゆく前にある店にて紙筆をかひつり錢を紙幣にてとり學校にゆきひらきみるに一枚多くかさなり居たらば汝は之を如何にするや

(五)他人の庭前を通るによく熟したる菓物上より落ちたらばこれをひろひとるもよろしきことにや

(六)まがきの外に樹の枝のさしでゝ多くの實を結べるあり子供これを見てこのくだものは遂に道に落つべし己れいま之をとるこそ却てよけれといふ此ことば道理に合へりと思ふや

(七)人の盜をなすに最初より重大のものをぬすむものありや一たび小盜をなすときは大盜になり易きものなりや

(八)一人の童子あり庭中にて桃の木の下に立ちまだ木には上らざれども心の中にて其の桃の實を取りたしと思へる折柄人の足音などして頻りに心動きす是れ何故なりや

(九)人は何故悪き事をなせば心地悪きや

(十)汝もし桃或は柹を得んと思へど自分に人の物をぬすむはあしきを知り他の童子をすかして取らしめ共に分て、これを食はゞ如何

(十一)もし路上にて金を拾はゞ汝は何とするや口にも出さずしてひそかにかくしおかば如何

(十二)もし童子ありて誤て茶瓶の蓋を毀ちひそかにもとの通りに合せ置かば如何

(十三)他人が封を切りたる手紙を忘れ置たるものあらんに汝もし竊に之を拔き見ば是れ甚だ悪き事と思ふや

(十四)汝公園に遊び人が見て居ぬ間に花を取りたり又は歩きてならぬ處の芝の上を歩きなどして汝の心にこゝろよきや

(十五)もし汝友達の小刀をかり、誤て之を失ひ其つくなひとして代りの品をわたし其後彼友達自身ま始めの小刀を見出すことあらん如此ときは汝等は兩人ながら何とするや

○過を謝する茶童の事

松平丹波守と云ふ大名あり江戸にて或人より見事なる盆栽の五葉松を所望して在所へ持ち歸り居間の椽に置て愛されける或朝茶童の十二三歳なるが掃除するとて箒を以て鎗をつかふまねしてあや

まりて彼松の大切なる枝を打折りける小姓頭驚きて是程めでさせ玉へる松を損じて何と申上べきと當惑しける所に丹波守出て彼松を見られ以ての外怒られ何者の所爲なるやと尋ねられ小姓頭なにとか執成さんとしけるとき茶童進み出て私今朝掃除いたすとき鎗をつかふ眞似して打折り候と申けるに丹波守憎きやつかなと申され奥へ入らる小姓頭は仕付の爲とて押込め置きけり二三日して丹波守

鷹狩に出でらるとて夜の引きあけごろ小夜着の如くなる緞子のかいまきを上に打かけ朝餉を食べられつゝ彼小僧は次に居るかと問はれけるに押込め置き候由申ければいらざる事を、呼び出せとて次の間へ呼び出し彼かひまきをぬぎ汝にくれると打附られ側の鐵砲とられ鷹の鳥のかけてありし中にて雁一羽取りれろし是は汝が母にくれるとてなげ出されける是れかれども僞を云はずして正直なるを

感じられまた其母がさぞ心痛せるならんと察して斯く物さへ與へられしなり

人は假にもつくりことをいふべからず誠さへ吐けばなしたる過も此茶童の如く心よくゆるさるゝものなりされば虚言などいふときは上が上に罪をかさね人よりも神よりも深く罰せらるゝものなり恐れざるべけんや

問題

(一)茶童は如何なることをなしたるかを話せ

(二)汝は茶童が植木鉢の近くにて鎗遣ひの眞似をしたるを好きことゝ思ふや

(三)汝は茶童の如何なる所に感心するや

(四)丹波守は其如何なる所に感心せしや

(五)汝は丹波守の爲す所に感心するや

(六)汝は過則勿憚改と云ふことを知れりや

○身を殺して仁をなすとて主家の兒を救ひし家婢の事

身を殺して仁をなすとて恩義のためには一命を抛ちても其急を救ふべし若狹の國の士何某の家婢十四歳なるもの元農家の子なり或日主人の兒を抱きて濱邊に遊び居けるに狂犬一匹何處よりか突然と

して飛び來り抱ける兒にかみつかんとす婢その兒をわたさじと抱きながら平地に打伏し身を以て是を禦ぎけるほどに總身をかまれ血まびれになるといへども敢て兒を放さずやがて犬は去りぬ婢苦痛を忍びて家に歸り兒を其母にわたして息絶えぬこれを救はんとすれどももはや力に及ばず國守これを聞き其義を感じこれがため石碑をたてられしといふ

問題

(一)兒守が爲せる始末を話せ
(二)汝は其兒守の如何なる所に感心するや
(三)他人より預りたる物は我身の物より大切なりや
(四)恩義と云ふものは主從の間にても朋友の間にても之を忘れてはならぬや
(五)汝は先代萩の千松のことを知れりや知らずんば之を話し聞せん
(六)汝は君父の爲めには命を棄てゝも其危難を救ふの決心ありや

○過を改めし手代の事

いつの頃にか美濃の大垣に住める豐島(さしま)屋某の子に

て幼より尾張名古屋の伊東の店に丁稚(でつち)奉公をなし年長ずるに従ひ段々取立てられ手代の列に加はりたるものあり同じ手代の中十六人にあつく交りともに酒色に溺れ遂に主人の金銀多く引れひせしに事あらはれ十七人一同に永のいとまを言渡されたり十六人の者共は兼て思ひしことなれば聊驚く事なく自からかへり見る心もなくて立ち去ける

としまや一人は始めて夢のさめたる如く是迄の過ちを悔て大に歎き番頭にねがひけるは私事幼年より召使はれ御用に立たざるものを年久しく養育なしたまはり恩義の深き事海猶浅し其をも打忘れあしき道に迷ひて奉公を怠り剰へ金をも引負ひ候事重々の大罪なれば如何なる重き御計らひもあるべきに猶ほ哀れみ深く永の暇を給はる事何程生をかへ奉公いたし候とも其厚恩を報ずる期はあるまじく候然るに永の暇給はれば再び當家へ立入る事ざ

に叶ひ候はねば報ひ奉るべきよすがも絶え生涯不忠の罪に沈みはて候はん此上の願には何とぞ今日より改めて再度の奉公を許し丁稚に抱へたまはれ然る上は聊怠なく相勤め彌々身を碎き心を盡し假令生涯に引負の金銀償ひ得ずともせめて厚恩の萬分の一なりとも報じ奉らんあはれ憐愍に聞しめし分けられたしと哭れ々々云ひ述べ涙にむせびければ番頭ども大に感じ理りある願なればとてやが

て主人に委しくいひ入ける

主人も深く感心し類ひ稀なるものなり願ひの如くはからへとありて豐島屋は其日より再び丁稚となり幼年の頭はもの丶辨へ少なく行屆かざる事多く夜はねぶりがちなりしも今度は己が勤むべき事は更なり同じ丁稚の務をも助けて其勞にかはり聊幼年のものをあなどらず手代番頭につかふること左ながら幼年の者の如くして少しも高ぶらず一寸の

間も油斷なく勤めければ番頭感じて主人につげ段々擧げ用ゐ遂にもとの如く手代に取立てけるに益〻精勤し又よく儉約を守り給銀の內叶ひがたき事にはいさゝか遣ひ其餘は番頭にかへし納めて引負ひの金銀を償ひ終りぬ主人を初め店中擧て感心せざるはなし又才智ありて何事も其任に堪ふるより程なく重立ちたる手代に擧げ用ゐ住むべき家に什物添へて與へ伊東杜石の家來となりて榮えけるとぞ

嗚呼世の人若し誤て惡事をなさば此人を以て師となし惡き腸を改め自らくやみ耻ぢざるべけんや

問題

(一)手代ハ如何なる事をなしたるや
(二)汝は過而不ㇾ改是謂ㇾ過矣と云ふことを知れりや
(三)汝は過を改めたる手代に感心するや
(四)手代の過あるものを伊東家にては何故再び用ゐしや
(五)汝は勅語の恭儉己を持しと云ふ語をよく記臆せりや

○中村惕齋先生の事

惕齋先生は京都の人にて幼より學をこのみ篤行の

人なりある時ほど近き家に火を失ひければ親戚門人驚きてはせあつまりぬをりふし先生の家は風下なりしがたちまち風ふきかはり風上となる今は類焼のうれひなしとて衆皆心を安んじ相賀するに先生ひとりかへつてうれふる色甚しければ人々あやしみて其故を問ふに今まで風上なりし家々は心を安んじ油断の所に、はかに風かはりし事なれば喜びたちまち引かはりてさぞあはて騒ぎて居るならんと思ひやりてうれふるなりとこたへられしかば人々も感じていそぎ火もとにはせゆき防ぎたすけしとぞ

己の幸を喜んで人の憂を知らざるは君子の道にあらず

問題

(一)惕齋先生は何故に自分の家が風上となりし時に心配せしや

(二)爰に人あり相知れる人と同道して歩けるとき其人が俄に病にかゝり路上に倒れたれば己れ災難にかゝらぬ爲め之を見棄てゝ我家に馳せ歸らば汝は其人を如何なる人と思ふや

(三)人の憂を憂ふるは善行なりや

(四)汝は勅語の博愛衆に及ぼしと云ふ語をよく記臆せりや

〇人の醜美は形にあらずして心に在る事

手足のかたはなるをば人なみにあらずとてなげき心の人に及ばざるをなげくものなし かたちはともかくもあれ心のおとるところ口をしけれ眉目かたちはなげきてもせんなし心はなほせばなほるものなり而るを心の劣れるを恥ぢずして容の劣れるを恥づるは道を知らざる人のなす所なり

女とても容よりも心の勝れるを善とす心様よしなき女は心さわがしく眼おそろしくものいひさがなく人をねたみ人をそらわらひ人に誇り顔なるものにてみな女の道にたがへり女子は人に従ふ身なる事をよくよく辨へ我儘氣隨の心を直しねたみかざましき志を改め學問の餘には裁縫料理の事をもならひ萬事すなほにして怠らず情深く心靜なるを第一とす

問題

(一)汝は友達を選ぶに顔貌は麗しけれども心ひがみ學問淺き者と眉目よからねども心正しくして才能ある者と孰れを取るや

(二)汝に二人の友達ありて一人は汝に美麗なる衣裳を買へと勸め一人は有益なる書物を買へと勸めば汝は孰れを良友と思ふや

(三)身にぼろを着ても學問と道徳の勝れたる人と錦の衣を纏ふとも身の行の正しからぬ人と孰れがよきや

(四)汝は衣服を美麗にすると清潔にするとの差別を知れりや

○眞田昌幸の事

關ヶ原の役終り眞田昌幸高野の久度山の麓に蟄居す時に大小の柄を木綿の打紐にて巻きたり或人之を笑ふ昌幸笑ながら假令上に錦を着たりとも心頑愚ならば用に立つまじ夫と同じく此魂を見るべしとて抜き見せしに兩刀とも相州正宗にぞ有りける世の人其木綿の打紐を稱して眞田打と云ふ

問題

(一)正宗とは如何なる刀なりや

(二)汝は昌幸の詞に感心するや

(三)論語に士志於道而耻惡衣惡食者未足與議也とありまた飯疏食飲水曲肱而枕之樂亦在其中矣不義而富且貴於我

如ニ浮雲一とあり汝は之を解し得るや

(四)また衣ニ敝縕袍一與ニ衣ニ狐貉一者立而不レ耻者其由也與とあり汝は之を解し得るや

○不具者の功名

關が原の合戰終りて家康諸將の家臣を召して盃を下されしに福島正則の士大將福島丹波はちんば尾關石見はかた目長尾隼人はつんぼなりしかば近習の人々よくもかたはのそろひつるよとさゝやきけるを家康聞玉ひ汝等年若くともよくきけ女は容儀を貴ぶこともあり士たるものは形は何如にもあれかゝる軍に大功名をなすを男とはするぞ彼の三人は世に勝れたるものなり汝等が志を十に二三も彼等に似せたらんにはよかりなんと仰せられたり

問題

(一)家康は如何なることを戒めしや

(二)汝は不具になりても功名を立てんことを冀ふや

(三)世には他人の不具なるを見て之を嘲り笑ふものあり汝は之を何と思ふや

(四)汝は不具なる人を見てハ之を憐れむや

○女子の教育

女の子は其親のこゝろによりては道といふ事も教といふ事もしらしめずしてそだつる人もありかゝれば世にはたゞかしらのかざり身のかざりなどの人に劣れるを恥かしと思ひてまことの女の道をしらざるもの多しかゝる女にて子をまうくるゆゑたゞ愛にのみ溺れ己れ我が二親にそだてられし如く幼より姑息にそだて教にも道にも絶えて心なければ其子もまた男女ともに道しらぬよからぬ人におひたち不孝の事どもあるもの多し其期に至りて俄に叱りのゝしりても先入すでに主となりていかんともせんすべなくたゞ夫婦うちよりてかなしむのみなるは自からなせる禍にて後悔更に益なし人よく百萬錢を出して女を嫁せしむることを知て十万錢を出して子を教ふることをしらずともいへり女の童もよく書をよみ教を受け古を以て鏡となし我

心を直しなば勝れたるまことの女となり父母の名をも揚げ孝女貞婦と稱せらるべし又我子にも教なくて叶はぬ理りを知りよく教へそだてゝ必ずよき子となし世に譽れを得て家も長く榮え親子とも限りなき福をうくべし斯ありてこそ誠に子を愛する者といふべけれ

問題

(一)女たるものは如何なる心懸が大切なりや
(二)母が善ければ其子まで善くなり母が悪ければ其子までも悪くなるものなりや
(三)女の子が頭かざり抔の人に劣れるを耻づかしと思ふはよきことなりや

○女子の行儀

女子はおさなき時より男女には自から差別あることを知りかりそめにも戯れたる事を見聞なすべからず古の禮にも男女は近寄りて坐することをせず同じ處にてゆあみせず女は女のなきところ又はくらきところにひとり居らず夜行くときは必ず燭を

ともして行くべしなど云ふことあり一切の事を此心持にて推はかりその身持をたゞしなむべし今時の人は此様なる禮をしらず身の行ひを猥りにして我名をけがし父母兄弟に辱をあたへ一生身をいたづらになすもの多し口惜しき事にあらずや大切の場に臨みては假令命を失ふとも心を金石の如く堅くして貞節を守ることを心懸くべし

問題

(一)言語を慎みて多くすべからずかりそめにも人をそしり偽りを云ふべからず人の誹りを聞く事あらば心にとゞめて他につたへかたるべからずこれ女子たるもの、殊更心得べき事なりもし之に背きたらば如何なる事のさし起るや

(二)汝は女と云ふものは男を猥りがましきことなきやうにすることが大切なる道理を知れりや男は猥りがましきことをなしてよきや

○神明には恩を謝すべし

朝暮神明をあがめたてまつる事是れ此世界は神明の造り玉へる所なれば人の産業つゝがなく父母妻子をやしなふ事みなそのめぐみによらざるなけれ

ば此高恩をおろそかにすべからざるが爲めなり神は非禮をうけたまはず正直を教へ玉ふものなれば萬事につけすなほにして少しも邪なる思ひをいだかず父母にもよくつかへば神もうれしく思召して其人を日夜に守り玉ふべし父母につかへを怠り產業を缺ぎ我身につかぬ富貴をいのらば神明もこれをにくみて禍を與へ玉はん

或處に一人の老夫三子と同じく家に居るものありたり深く大黑神を信じ常に金穀の餘りあらん事を欲しこれを願ふて止まず日に盛饌を備へて禮拜し崇敬至らざる所なかりしに其子三人とも俄に死せり老夫大にかなしみ大黑神の前にて且泣き且恨み身體もおのづからやせおとろへたり然るに或夜大黑神夢枕に來て汝平日富を求むれども富はにはかに得べからざるゆゑ先づ汝が子を殺し米穀を食ふものを減ぜしめたり若し年を積まばかならず金穀

あまりありて汝が願ひの如くならんといひたりしとぞ神明には恩を謝すべし理もなき事をみだりに祈願するは愚人のしわざにて笑ふべき事なり

問題

(一)汝は何故神明が大切なりと思ふや

(二)如何なることをなせば神も嬉しく思ふや

(三)大黒神は如何なることと云ひしや又何故左様云ひしや

(四)汝は大黒神は誠に其詞の如くに思ひて云ひしと思ふや

(五)汝は此の大黒神の話は實事と思ふや又は譬諭の敎と思ふや

○君父の不是を見ず

およそ君たり父たるもの我を待つこと其道を得ずこれがために困苦を極むる事あるも忠臣孝子のこれを以て君父の不是とすることを聞かず彼の非理を以て臣子を虐使すと稱するは皆外より見てこれに名づくるものなり忠臣孝子の心に於ては初より少しも君父を怨むる事あらず唯其己が君父に得られざるを患ふるのみ然れどもまた君父の過ちを見ては之を諫むることあり其諫むると云ふも君の政

事の道に違へる事及び父母の其郷黨州閭に於ける悪事の類にして己を待つことの厚からざるを咎むるにあらず世の愚人は君父の過を諫むる事あたはず反て其己を待つことの薄きを怨むるもの多しよく〳〵意を用ゐて愚人のなす所にならふことなかれ

問題

(一)君父を怨むることは僻事なりや
(二)君父に悪しき事あるときは如何になすべきや
(三)愚人は如何なることをなすや

○菅原道眞公の事

昌泰三年九月十日清涼殿にて菊の御宴ありし時道眞公も之に陪し詩を献ず天子叡感の餘り御衣を公に賜ふ公踏舞して感喜し玉ふ筑紫に配流の時も御衣をば天子の御記念なりとて御身をはなさず持下り玉ふ延喜元年九月十日去年の事を思ひ出で玉ひて一篇の詩を賦し玉ふ

去年今夜侍清涼。秋思詩篇獨斷腸。

恩賜御衣猶在此。捧持毎日拜餘香。

公が無實の罪を受けながら君を怨み人を尤め給はぬ心の底こそ有難けれ

問題

(一)汝は道眞公は如何なる人なるを知れりや

(二)道眞公は天滿宮とて神と崇められ世人の尊敬淺からぬほども汝も能く知れるならん公は如何なる德ありて斯く尊敬せらるゝや

○(一)楠正行の事

頃は後醍醐天皇の延元元年の事なり楠判官正成既に左中將新田義貞を助け足利尊氏直義兄弟を誅罰の爲め兵庫下向の命を蒙り五月十六日に都をぞ立出ける是を最後の合戰と思ければ嫡子正行が今年十一歲にて供したりけるを思ふやうありとて櫻井の宿より河内へ返し遣しける其時正成正行を近く呼び寄せ云ひけるやう汝幼と云へども已に十歲に餘りぬ一言耳に留らば我教誨に違ふことなかれ今度の合戰天下安否の分け目と思ふ間今生にて汝が

顔を見んことこれを限りと思ふなり正成已に討死すと聞なば天下は必ず足利の世と成りぬと心得べし然といへども一旦の身命を助からん爲に多年の忠義を失て降人に出ることあるべからず一族若黨の一人も死殘てあらん程は金剛山の邊に引籠て敵寄來らば命を矢先にかけて忠節を勵むべし是ぞ汝が第一の孝行ならんずるぞと泣々申し含めて各々東西へ別れにけり

居ること間もなく正成湊川にて討死す尊氏舊好の程も不便なり跡の妻子共今一度空き貌をもさこそ見たく思らめとて其首を河内なる楠が家にぞ送りける楠の後室嫡子正行出しを限りの別なりとは兼てより思ひまうけしことながら今しも目塞がり色變りて昔の樣に似もやらぬ死したる首を拜しては流石に悲しさ胸に餘り歎の涙せきあへず正行終に堪兼て流るゝ涙を袖に抑へ遽に起ちて持佛堂の方

へ行けるを母怪しく思ふて妻戸の方より行て見ればは父が兵庫へ向ふ時形見に留めし菊水の刀を右の手にぬき持ち袴の腰を押下て自害をせんとぞし居たりける母急ぎ走り寄りて正行が小腕に取付き涙を流して申付けるは栴檀は二葉より芳しと云へり汝稚くとも父が子ならば是程の理に迷ふべきやは見心にも能く〱事の様を思ふて見よかし故判官が兵庫へ向ひし時汝を櫻井の宿より返し留めしは

全くなき跡を弔らはん爲に非ず腹を切れとて殘し置しにも非ず我縱ひ運命盡て戰場に命を失ふとも君何處にも御坐ありと承らば死殘りたらん一族若黨共を扶持し置き今一度軍を起し御敵を滅して君を御代にかへしまいらせよと云置きしにあらずや其遺言具に聞て我にも語りし者がいつの程にか忘れけるぞや斯ては父が名をつぎ君の御用に立まいらせんこと有べし共覺えずと泣々諫め留めて拔き

たる刀を奪ひとれど正行も泣倒れ母と共にぞ歎き
ける其より後は正行父の遺言母の教訓心に染み肝
に銘じつゝ童共と戯れ遊ぶにも頸を捕る眞似をし
ては朝敵の首を捕るなりと云ひ竹馬に鞭を當てゝ
は足利殿を追懸るなりなど云て墓無き手ずさみに
も父の敵を亡し君の御憤を休め奉らんことを忘れ
ざりける

正行漸く年を層ぬるに從ひ討死せし郎從共の子孫

を見ては愈々之を愛しみつゝ明暮肺肝を苦めける
が光陰流れ易ければはや二十歳の春をも過ぎぬ折
しも芳野の朝廷益々衰運に傾きぬれば正行大に之
を歎き兵を諸方に出し遂に藤井寺住吉兩度の合戰
に大功を奏し將に進んで平安の舊都に攻入らんと
し官軍再び大に振へり

尊氏兄弟此樣を見て大に懼れ二十餘州の兵を發し
高師直を總督となし其弟師泰と倶に正行を撃しむ

時に後村上天皇正平二年十二月なり正行乃ち弟正時從弟和田正朝等と一族打連れ其二十七日吉野の皇居に參じ四條中納言隆資卿を以て奏聞しけるは父正成嘗て微力を以て大敵を挫き先朝の宸襟を休め奉りし後天下程なく再び亂れて逆臣西國より攻上り候砌遂に攝州湊川にて討死仕り候其時正行十一才に罷成候しを合戰の場へは伴はで河内へ歸し死殘り候んずる一族を扶持し朝敵を亡し君を御代

にかへし奉れよと申置て死て候然るに正行已に壯年に及候ぬ此度こそは魂膽を碎き合戰仕り候はずば且つは亡父の申し、遺言に違ひ且つは武略の云甲斐なき謗に落つべく覺え候待つ所あるもの思ふに任せぬ習ひにて病に冒され早世ども仕り候なば只君の爲には不忠の身となり父の爲には不孝の子となるべきにて候間今度師直師泰に懸け合い身命を盡し合戰仕て彼等が頭を正行が手に懸けて候か

正行正時が首を彼等に取られ候か其二つの中に戰の雌雄を決すべきにて候へば今生にて今一度君の龍顏を拜し奉らん爲に一族引連れ參内仕て候と申しも敢へず淚を鎧の袖にかけ義心面に顯はれける主上乃ち南殿の御簾を高く捲せて玉顏殊に麗しく諸卒を臨視あつて正行を近く召され以前兩度の戰に勝利を得て敵軍の氣を屈せしめ叡慮先づ憤りを慰する條累代の武功返す〳〵も神妙なり大敵今勢

を悉して來るなれば今度の合戰誠に天下の安否たるべし去りながら進退度に當り變化機に應ずるは勇士の心とする所なれば進むべきに進み退くべきに退き以て後を全ふすべし朕汝を以て股肱とす愼て身命を輕んずることあるべからずとぞ仰せられける

正行たゞ頭を地に付けとかくの答詞にも及ばず是を最後の參内なりと思ひ定めて淚ながらに退出す

其より正時正朝以下今度の軍に一足も引ず一所にて討死せんと約束したりける兵ども百四十三人と倶に先帝の御廟に參て今度の軍難儀ならば討死仕るべしとて暇を告げ如意輪堂の壁板に各々名字を書き連ねて

返らじと兼て思へば梓弓
なき數に入る名をぞ留る

と一首の歌を書留め各々鬢髪を切て佛殿に投げ入れ其日芳野を打出て、戰場へと向ひける遂に四條畷に於て師直が陣に斫入り正時正朝等とゝもにはなばなしく討死して名を萬世に傳へける時に正平三年正月五日なり正行年二十二世に小楠公と稱ふるは即ち此正行朝臣のことなり

問題

(一)正成は如何なることを正行に遺言せしや

(二)正行の母は如何なる時に如何なることを正行に教へしや

(三)正行は平生如何なることを心懸けしや

(四)正行は芳野にて如何なることを奏聞せしや
(五)汝は正行の如何なる處に最も感心するや
(六)汝は正行の如きは忠と孝とを全うしたる人と思ふや
(七)汝は勅語中の克く忠に克く孝にと云ふ語を記憶せりや
(八)汝はまた勅語中の一旦緩急あれば義勇公に奉しと云ふ語を記憶せりや

○平生の戒

かろ〴〵しく人と約束をなすことなかれもし一たび約束せば之をかはすことあるべからず

恩をうけては忘るべからず人に施しては思ふことなかれ

人の悪事はいさゝかたりとも語るべからず人の善事はかりにもそしるべからず

善事を聞ては我も行はんと思ひ悪事をみば我身をかへりみよ

わがねがはしからぬことは他人に施さずわがねがひのぞむことは務て人に施すべし

つとむれば福きたり怠れば災きたる

富貴をそねまず貧賤をかろしめに
驕る心なく身の分限をまもれ
貪る心起らむ淺間しきかなと自ら耻ぢよ
僥倖は禍を引くの階と思ひ憤怒は身を焚くの火と
知るべし
善をせむる友をきらひ己にへつらふ人を愛するな」
たはむれにも僞りを言ふな
物さわがしく若くは危き場處に近寄らぬ樣にせよ」

志はいかにも高く持ち行はいかにもへりくだるべ
し
一寸の時刻も千金と思ひうか〳〵とむだにつひや
すな
毛ほどの惡も必ず改め少しの善も必ず爲すべし
○徳川秀忠の名言
秀忠曰く總て世人の云習はしに浮世は夢なり一寸
先は闇なれば片時も樂むこそよけれとこれ大なる

僻言なり夢の間は少しなれば慎むべしまた短けれ
ば慎みやすからんと

◯忠言は身の良藥

良藥は口に苦けれども病に利あり忠言は耳にさか
へども身の行に益あり人の諫めをば心をとめて聞
べしいさめをいふほどなほまがるものあり是れ
下等の人なり人の諫めをよく用ゐて身持をなほす
をかしこき人とす

我身のあしきをいふ人あらば是こそ我師なれと思
ひて近づくべし我よきをいふものあらば是れ我た
めに仇なりと思ひしりぞくべし我いふ事を其もよ
し是もよしといふ人はまじはりても益なし慎むべ
し人情として善事は告げやすく過失はつげ難し故
に聞くものは聊包まず心を虚くして受くべし告く
るものは聊拒まず言を盡して諫むべし諫むるには
人の知らざるやう其人へのみ告くべし假令平常親

友にあらざればとて其人へは告げずして他人と共に其過失を語りて席上の樂とするは朋友の道にあらば

問題

(一)汝は能く他人の諫めを聽くを善人の行と思ふや
(二)諫めは何故大切なりや
(三)汝は他人を賞ると諫むるといづれが易しと思ふや
(四)世間には他人に非を云はるれば其人を忌み嫌ふ者あり汝は是等の人を如何に思ふや
(五)非を遂ぐると過を改むるとはいづれがよきや
(六)汝は面從腹非と云ふことを知れりや

○暗室を欺かず

世の人不善の事をなして他人の見ざる聞ざるを幸として安然として自ら肆にし畏れ忌むところなきものあり人の耳目はおほふべし神の聰明は蔽ひかたき理をば絶えて知らず凡人の心に暗室無人のとき巳ひとり爲すと思ふされども神明といふものありて先すやく是を知りて冥罰を加へ玉ふこと顯明の地に惡をなすより速なり上天のことは聲もなく臭

もなけれども神のいたるはえかるべからば凡世界の事に聞ざる所なく見ざる所なきなり恐れざるべけんや

問題

(一)何故に暗室人なき處にても悪事をなすべからざるや

(二)他人が見ず聞ざるとも悪事をなさば汝は之を甚だ卑怯なる振舞と思はざるや

○初めに勤むべし

人は幼少の時よりあだなる遊をなさば手をならひ書をよみ藝をまなぶを以て遊びとすべしかやうのことは初は甚だ面白からざれどもやうやく習ひなれぬれば自からなぐさみとなるものなり大切なる時を惜まず益なきわざをなし無頼の小人にまじはり徒に爲すことなくて月日を送るものは終に才智もなく藝能もなくして何事も人に及ばず人に賤めらるゝに至るものなり少年の時は氣力も記臆も強ければ時を惜みて勉強し置くべしかくすれば身終るまで忘れば一代の寶となる年たけ齢ふけぬれば

事多くして暇なく氣力へりて記憶よわくなり學問に苦勞してもしるし少し萬のこと後のためよきことを専らに勤むべし初め勤めされば必ず後の樂なし初めに愼まざれば必す後の悔あり

問題

(一)汝は何故少年の時に勉强すべき道理を知れりや

(二)汝は勅語の學を修め業を習ひ以て智能を啓發し德器を成就しと云ふ語をよく記憶せりや

○益軒、蕃山、白石の事

貝原益軒は筑前の人なり幼より學を好み海内比び

なき碩學となれり常に世を救ひ民を利するを以て心となし大和俗訓、童子訓、初學訓、初學知要を始めとし百數十種の有益なる書を著はし八十餘歲に至て猶已ざりしとぞ

熊澤蕃山は少して備前の池田光政に仕ふ少年の間は四方に遊學して頗る艱苦を嘗めしが學成るに及んで光政之を擧け用ゐ國政に當らしめたり光政は世に新太郎少將と稱し烈公と謚せられたる人にて

世に稀なる賢君なれば蕃山も深く其知遇に感じ大に備前の國政を振ひ起し名を海内に轟したり

新井白石は江戸の人なり壯年の頃は非常の苦學をなしたる人なるが後には大に將軍家に用られ從五位下に叙し筑後守に任せられ其功績世に著るし著書も百六十餘種に及び世を益すること淺からず

問題

(一)汝は此人々はいづれもよく勅語の學を修め業を習ふと云ふ語に適へる人と思ふや

(二)汝は勅語の進んで公益を廣め世務を開きと云ふ語をよく記臆せりや

(三)汝は此人々は公益を廣め世務を開きと云ふに適へる人と思ふや

○吉田了以及び伊能忠敬の事

吉田了以は京都の人なり初め與七と稱す後ち了以に改む天文二十三年を以て生る天性工事に巧みにして我邦治水の業には功勞多き人なり今その著るしきものを擧げんに慶長九年了以美作の國に往き

和計川に通へる河船を見て百川概ね皆船を行るべしと思ひ京都に歸りて直ちに大堰川の上流（今は保津川と稱する所）を遡り見るに纔に筏のみ通へれども工事さへ施しなばなほ舟すべしとて翌年其子玄之を江戸に遣り幕府の許しを乞ひしに幕府にても山丹二州の幸なればとて速にこれを許せり是に於て同じく十一年の三月より其工事に着手し河中の大石は或は轆轤索を以て之を移し或は其上に高く足代を搆へ鐵

槌の頭尖りて長さも周りも各三尺柄の長さ二丈餘もあるに數多の索を結び付け數十の人夫をして之を上げ下げして打碎かしめ河廣くして水淺き所は石を疊みて水を深くし瀑ある所は上をうがちて流を緩むるなど數多の工夫を凝し八月に至りて全く成れり十二年の春幕府の命により駿河國富士河を浚へ岩淵より甲府に至るまでの間に河船を通はすこととなし十六年鴨川に舟を通せんことを請ひ伏

見より京都に至るまで運河を作れり今の高瀬川是なり此等の事業其地方の民今に至るまで其利を蒙らざるはなし慶長十九年享年六十一歳を以て卒す嵐山の大悲閣は了以の建立せし所にて是に今猶了以が大綱を捲きて圓坐となし手に鍬を把り片膝を立て坐せる像を安置せり子玄之亦水運の業には其功績少からず

伊能忠敬は下總の人なり夙に暦學を好む年五十に

して家を其子に讓り江戸に出て暦學を修め西洋の暦法を聞て感する所あり遂に測量の術に志し苦學年を層ね大に得る所あり寛政十二年始めて幕府の命を受けて蝦夷地を測量し其後引續き各地の測量に從事し言ふべからざる辛苦艱難を嘗め十八年間の久しきに涉り遂に全國海岸の測量を終へ文政元年四月七十四歳を以て沒せり我國古來測量の業は實に伊能氏に及ふものあることなく地理を說くも

の航海を爲すもの皆其の餘澤を受けざるはなし

問題

(一)了以忠敬は如何なる事業を遺せしや

(二)汝は了以忠敬の如きはよく勅語の公益を廣め世務を開きと云ふ語に適へりと思ふや

(三)汝も了以忠敬の爲したる如き事業をなさんとする志ありや

(四)忠敬は其在世中に於ても幕府の褒賞を受け邸宅までも賜はりたるが去る明治十六年には朝廷より正四位を追贈せられ又東京芝公園の丸山には有志の人相謀りて一の銅製の紀功碑を建てたり汝は之を知れりや

○思案して行ふべし

萬の事つらつら思案して後のあやまりなく悔なからんことをはかるべし思案せずしてかるがるしく行へば必ずあやまりあり悔ありもし急なる事あらばことさらよく思案して行ふべしいそぎて心さはがしくしづかならざれば必ずあやまりあり悔あり

小早川隆景或時火速の事ありて佑筆にものをかゝするに急用の事なり靜に書くべしと云はれける

問題

(一)何故思案が大切なりや

(二)汝は急がば廻れと云ふ諺を知れりや

○分別の肝要は仁愛なり

黒田長政小早川隆景に問て曰く分別は如何したるがよく候や隆景曰く別の子細なし只久しく思案して遅く決斷するがよく候長政又同じ分別にも肝要ありやと問ふ曰くこれあり分別の肝要は仁愛なり万事を決斷するに仁愛を本として分別すれば万一其思慮理に當らざる事ありとも間違少なし仁愛の心なき分別は才智巧なりとも皆僻事なりと知り玉ふべしと云はれたり

問題

(一)茲に人あり何事を爲すにも過ては改めさへすればよしとて思案をせず輕忽に決斷するを常とす汝は之をよしと思ふや

(二)物事を決斷するに我身に利益さへあれば他人の迷惑になりても之を顧みずして宜しきや

附問題 國民修身談下終

300

明治二十四年十一月一日印刷
同　年十一月二日出版

定價金二十錢

版權所有

著作兼發行者　福岡縣平民　末松謙澄
東京市芝區芝公園第五號地

印刷人　東京府士族　根岸高光
東京市牛込區市ケ谷加賀町壹丁目二十三番地

大賣捌所　金港堂
東京市日本橋區本町

尋常小學用挿書 國民修身談 末松謙澄著 近刻

東京秀英舍印刷